

請願理由

2022年、CDC（アメリカ疾病予防管理センター）がアメリカの子どもたちを含む2310人の尿を検査した結果、8割以上からグリホサートが検出されました。日本でも2019年に、国会議員含む28人の毛髪検査をしたところ、7割からグリホサートが検出されています。グリホサートは輸入小麦だけでなく、遺伝子組み換え食品にも残留しています。日本は、年間の米消費量より多い約2000万トンの遺伝子組み換え作物を輸入しています。多くの日本人にグリホサートが残留している可能性があり、その影響が懸念されます。

農薬は、主成分と補助剤で構成されます。補助剤は企業秘密で公開されていません。除草剤ラウンドアップの補助剤の毒性は、主成分グリホサートの1000倍以上高いとカーン大学セラリーニ教授は指摘しています。またセラリーニ教授は、補助剤には危険なヒ素が含まれていることも明らかにしました。ヒ素は、多臓器不全などの重篤な病気を引き起こす公害の原因です。国の定める残留基準値やADI（一日摂取許容量）は、農薬メーカーが主成分のみで行う動物実験から算定されます。主成分と補助剤の毒性が1000倍以上違えば、残留基準値もADIも安全とはいえません。なおラウンドアップだけでなく、日本で使用されるすべての農薬の残留基準値とADIは、主成分のみで決められています。日本は、世界第3位の農薬使用国にもかかわらず、農薬の毒性が過少に評価されているのです。

2019年、欧州司法裁判所では、「農薬は単独の有効成分だけではなく、その売られている状態における安全性が審査されなければならない」との裁定がなされています。子ども達が摂取するのは、主成分グリホサートだけではありません。摂取するのは、輸入小麦や遺伝子組み換え食品に残留する除草剤ラウンドアップです。

東京都学校給食会が2021年12月に実施した残留農薬検査は、精度が低い（下限値0.1ppm）ため、低濃度での残留は検出できず不十分です。精度が高い（下限値0.01ppm）農水省の検査では、アメリカ産小麦97%、カナダ産小麦100%からグリホサートが検出されています。輸入小麦を使用する学校給食のパンからは、グリホサートが検出される可能性は高いです。グリホサートはごく微量（4 μ g/kg/日）の長期摂取で影響があることが2017年のロンドン大学の研究で指摘されています。相次ぐ食品の値上げで学校給食の現場も難しい対応を強いられていると思います。しかし、子どもの命と健康はお金には代えられません。子ども達を守るために、是非とも予防原則で対応して下さい。

以上のような観点から、文京区議会に対して下記の事項を請願いたします。

請願事項

- 1 子ども達の命と健康を守るため、予防原則に基づき、グリホサート残留の可能性が高い輸入小麦は学校給食での使用をやめて、国産小麦または米飯にするよう区に求めること。
- 2 国が安全とする基準値は主成分のみから算出されており、ラウンドアップの補助剤の強毒性が無視されるため、輸入小麦を使用するのであれば、今の1000倍以上厳しい安全基準値を独自に設定するよう都教育委員会に求めること。
- 3 保護者や子どもが学校給食でのグリホサート残留数値をいつでも調べられるように、低濃度の残留が検出可能な検査施設での検査、定期検査の実施、東京都学校給食会ホームページ上での検査データの公開を都教育委員会に求めること。
- 4 農薬は、市販される農薬（主成分と補助剤）から残留基準値と一日摂取許容量を算定するよう国に求めること。
- 5 農薬の毒性試験（発がん性など）は、市販される農薬（主成分と補助剤）を使用して行うよう国に求めること。